

(4月29日)「士師記8:29~35」

ギデオンには多くの妻がいたので、その腰から出た息子は七十人を数えた。  
(士師記8章30節)

・昨日の箇所でも触れたように、ギデオンは異教の神々に仕える人たちの金の耳輪でエフォドを作ります。これは「偶像崇拜」に当たります。ギデオンが存命中は何事でもありませんでしたが、死後にはよくないことが起こりそうです。

・ギデオンの息子の数は、70人でした。70という数には、驚かされます。ヤコブの息子ですら12人でした。ただ後にイスラエルの王になるソロモンには、700人の王妃と300人の側室がいたようです。上には上がいるものです。

・その中に、シケムにいた側女から生まれた息子アビメレクもいました。彼は9章の主人公になります。ギデオンは別名を、エルバアルと呼ばれます。エルは神さま、バアルは異教の神の名前です。神さまと異教の神々を、天秤にかけているようにも聞こえます。

(4月30日)「士師記9:1~5」

彼らがバアル・ベリトの神殿から銀七十をとってアビメレクに渡すと、彼はそれで命知らずのならず者を数名雇い入れ、自分に従わせた。  
(士師記9章4節)

・9章には、エルバアルの子アビメレクの物語が載せられています。エルバアルとは7章1節にも書いてある通り、ギデオンのことです。9章にはエルバアルという名前が何か所も出てきますが、「ギデオン」とは書かれていません。

・エルバアル(ギデオン)は多くの妻や側女がおり、その息子は70人にもものぼりました。ここに出てくるアビメレクはシケムにいた側女の子どもです。正妻の子ではなかったので、負い目もあったのかもしれませんが。

・彼は母の故郷シケムに行き、クーデターを企てます。自分の腹違いの兄弟を、すべてならず者によって殺させるのです。アビメレクという名には、「わが父は王」という意味があります。しかし彼は、自分自身も王となろうとしたのです。

## 士師記 通読

4月



(4月 1日)「士師記 2 : 16~23」

その士師が死ぬと、彼らはまた先祖よりいっそう墮落して、他の神々に従い、これに仕え、ひれ伏し、その悪い行いとかたくなな歩みを何一つ断たなかった。  
(士師記 2 章 19 節)

- ・ここから士師という言葉が出てきます。聖書で士師とは、イスラエルのために神さまが立てられた人を指します。ヨシュアが死んで、民を正しく導く指導者がいなくなったイスラエルの民のために、神さまが遣わされたのです。
- ・士師は「裁き主」として、また「治める者」として民を導きます。預言者が神さまから預かった言葉を伝えるのに対して、士師は指導者としての側面が強いようです。彼らが先頭に立っているときには、民はきちんと歩んでいきます。
- ・しかし士師が死ぬと、民はまた神さまから離れ、墮落していく。そこで神さまはまた新たな士師を立てる。すると民は正しい道に戻って来る。けれどもまたその士師が死ねば…。それが繰り返されていくのです。

(4月 2日)「士師記 3 : 1~6」

彼らはイスラエルを試みるため、主がモーセによって先祖に授けられた戒めにイスラエルが聞き従うかどうかを知るためのものであった。  
(士師記 3 章 4 節)

- ・ようやく土地の配分がおわりました。ただ当然、イスラエルの人たちが住むことになった場所には、先住民がいました。彼らは力づくで住んでいる場所を奪われます。「平和的解決」ではありません。
- ・しかしすべての人たちが追い出されたわけではありません。カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人がそこにはいました。イスラエルの人たちは、その民族の人たちと婚姻関係を結ぶこともあったようです。
- ・しかしそれは、神さまの目には良くないことでした。ユダヤ人は、血統をととても大切にします。他民族との交わりなど、あってはならないことだったので。そのことによって、宗教も混在してしまうからです。なんだか排他的な民族ですね。

(4月 27日)「士師記 8 : 18~21」

ギデオンは、ゼバとツアルムナに言った。「お前たちが、タボルで殺したのはどんな人々だったか。」彼らは、「あなたによく似ておられました。皆、王子のような風貌でした」と答えた。

(士師記 8 章 18 節)

- ・ギデオンは捕らえたミディアン人の王ゼバとツアルムナを尋問します。ギデオンにはタボルに残した家族がいました。その地も戦場となったために、家族の安否を気にしていたのでしょう。
- ・しかし二人の王から聞かされたのは、悲しい事実でした。「王子のような風貌」という特徴を聞き、ギデオンはそれが自分の兄弟であることを悟ったのです。ギデオンは怒りを燃やします。
- ・このときギデオンの息子イエテルはギデオンの命令の通りに、二人の王を殺すことができませんでした。ギデオンは息子を一人立ちさせるために命じたのでしょう。ただ我が子に殺害を命じるなんて、、、時代でしょうか。

(4月 28日)「士師記 8 : 22~28」

ギデオンはそれを用いてエフォドを作り、自分の町オフラに置いた。すべてのイスラエルが、そこで彼に従って姦淫にふけることになり、それはギデオンとその一族にとって畏となった。

(士師記 8 章 27 節)

- ・神さまの命じるとおり 300 人でミディアン人を破り、多くの戦利品を獲たギデオンですが、好事魔多しということでしょうか、神さまの目に良くないことをしてしまいます。金のエフォドを作ってしまうのです。
- ・その材料は、異教の神々に仕えていたイシュマエル人がつけていた金の耳輪です。そしてここに出てくるエフォドとは、置物です。旧約聖書の中で厳しく禁じられていた、「偶像」を作ってしまったのです。
- ・そしてそのエフォドは、姦淫の象徴ともなっていくます。人は誰でも物事がうまくいったときこそ、身を引き締めなければならない。そのことを今日の聖書の箇所は、わたしたちにも伝えているようです。

(4月 25日)「士師記 8 : 1~9」

彼はスコトの人々に言った。「わたしに従ってきた民にパンを恵んでいただきたい。彼らは疲れきっている。わたしはミディアンの王ゼバとツアルムナを追っているところだ。」

(士師記 8 章 5 節)

- ・ギデオンのところには最初、マナセ、アシェル、ゼブルン、ナフタリから兵士が集まりました。その数は 23,000 人にもなりましたが、ギデオンは神さまの言葉通り、その中から 300 人を選びました。
- ・そのときに、エフライム族の人たちは声を掛けられていなかったようです。ギデオンがミディアン人に負けていれば何も言わなかったでしょうが、「勝ち馬に乗る」ことができなかつたためにギデオンに文句を言います。
- ・ギデオンはさらにミディアン人を追撃します。その途中でスコトとペヌエルという場所を通ったときに、ギデオンはその土地の人たちにパンを要求しますが、断られます。ギデオンは捨て台詞を吐いて、先へと進んでいきます。

(4月 26日)「士師記 8 : 10~17」

ギデオンは町の長老たちを捕らえ、荒れ野の茨ととげをもってスコトの人々に思い知らせた。

(士師記 8 章 16 節)

- ・ギデオンはわずか 300 人の兵を率いていましたが、15,000 人の軍勢を率いるゼバとツアルムナを捕らえます。彼らの陣営は、安心しきっていたと書かれています。50 倍の軍勢がいたわけですから、それは当然です。
- ・昨日の箇所でもギデオンたちにパンを渡すのを拒んだスコトとペヌエルの人たちも、同じ思いだったのでしょうか。まさかそんな少人数の「ギデオン軍」が、戦いに勝利するとは思えなかつたのです。
- ・ここでギデオンがスコトとペヌエルの人を許せば、彼の株は上がったのですが。彼はスコトの長老 77 人を捕らえ、荒れ野の茨ととげをもって思い知らせます。またペヌエルの塔を倒し、その町の人を殺します。敵を作るタイプですね。

(4月 3日)「士師記 3 : 7~11」

イスラエルの人々が主に助けを求めて叫んだので、主はイスラエルの人々のために一人の救助者を立て、彼らを救われた。これがカレブの弟ケナズの子オトニエルである。

(士師記 3 章 9 節)

- ・ここから、士師が登場していきます。最初の士師は、オトニエルです。彼はヨシュアと共にエジプトを最初から経験したカレブ（エフネの子）の弟であるケナズの子でもでした。つまりオトニエルはカレブの甥にあたります。
- ・彼が士師として立てられたきっかけは、「イスラエルの人々は主の目に悪とされることを行い、彼らの神、主を忘れ、バアルとアシェラに仕えた」からです。特に他の神々に仕えることは、大きな罪でした。
- ・神さまは士師オトニエルにイスラエルの裁きを任せます。ここでいう「裁き」とは罰を与えることではなく、正しい道に導くという意味です。オトニエルは 40 年にわたって主の霊と共にイスラエルを裁き、その期間イスラエルは平穏でした。

(4月 4日)「士師記 3 : 12~17」

こうしてイスラエルの人々は、十八年間、モアブの王エグロンに仕えなければならなかつた。

(士師記 3 章 14 節)

- ・最初の士師オトニエルが死んだ後、イスラエルの人々はまた神さまの目に悪とされることをおこないます。監視の目がなくなればすぐに悪いことをしてしまう、中高生のころの自分のようです。
- ・そのイスラエルを懲らしめるために、神さまはモアブの王エグロンを強くします。近隣諸国に脅かされてしまうのは神さまの業であり、その原因もイスラエルの民にあるということを聖書は語ります。
- ・18 年間、イスラエルの民はエグロンに仕えます。そして神さまに助けを求めるのです。ちゃんと自分の足元を見なさいという、神さまからのメッセージのようです。そして神さまは 2 番目の士師、エフドを立てます。

(4月 5日)「士師記 3:18~23」

剣は刃からつかまでも刺さり、抜かずにおいたため脂肪が刃を閉じ込めてしまった。汚物が出てきていた。  
(士師記 3 章 22 節)

・エフドは左利きでした。当時、左利きには良いイメージがありませんでした。右利きより「劣っている」と考えられていたのです。日本でも少し前まで、左利きの人を右利きに矯正することがありました。それと同じような考えでしょうか。

・ただエフドは、左利きの利点を生かします。右利きの方は左の腰に剣を指します。まさか右腰に武器が隠されていようとは、警備の人たちも気づかなかったことでしょう。そして貢物を持って、エグロンの元に行きます。

・エフドはエグロンと二人きりになり、王の腹を刺します。エグロンはイスラエルから多くを搾取していたのでしょう。非常に太っていたそうです。ただ剣の刃が抜けなくなると、ちょっと太りすぎです。メタボですね。

(4月 6日)「士師記 3:24~31」

待てるだけ待ったが、屋上にしつらえた部屋の戸が開かないので、鍵を取って開けて見ると、彼らの主君は床に倒れて死んでいた。  
(士師記 3 章 25 節)

・エフドが王の腹を刺したとき、血は流れ出ずに代わりに汚物（便のことでしょう）が出てきたそうです。そのため従臣たちは用を足しているのだと勘違いしました。叫び声もあげることができなかつたのでしょうか。

・そして従臣たちが手間取っている間に、エフドは逃げることができました。これらのことも、神さまの導きによるものなのでしょう。こうしてイスラエルの人たちはモアブを打ち滅ぼします。その後 80 年間、イスラエルは平穏でした。

・31 節には、アナトの子シャムガルについて書かれています。彼は小士師と呼ばれ、オトニエルやエフド（大士師と呼ばれます）とは違い、直接外敵の攻撃は受けていないとされます。それにしてもペリシテ人を 600 人も打ち殺しています。

(4月 23日)「士師記 7:15~18」

わたしとわたしの率いる者が角笛を吹いたら、あなたたちも敵の陣営全体を包囲して角笛を吹き、『主のために、ギデオンのために』と叫ぶのだ。  
(士師記 7 章 18 節)

・ギデオンは従者ブラと共に、敵陣の武装兵のいる前線に行きました。そこにはミディアン人やアマレク人、東方の諸民族がいなごのように数多くおりました。しかしそこで聞いた夢の話と解釈は、ギデオンに勇気を与えたようです。

・ギデオンは神さまが、ミディアン人の陣営を自分たちに渡されるという確信を得て、自分の陣営に帰ります。そして彼は 300 人をさらに三つの小隊に分け、全員に角笛と空の水がめを持たせるのです。

・さらに水がめの中には松明を入れるのですが、これはギデオンの考えなのか、神さまの命令なのか、どうなのでしょう。ただ、「主のために」はいいのですが、「ギデオンのために」という掛け声はちょっといただけません。

(4月 24日)「士師記 7:19~25」

三つの小隊はそろって角笛を吹き、水がめを割って、松明を左手にかざし、右手で角笛を吹き続け、「主のために、ギデオンのために剣を」と叫んだ。  
(士師記 7 章 20 節)

・なぜギデオンは空の水がめの中に松明を入れさせたのか、その理由はこうでした。ギデオンたちは 100 人ずつ、深夜に行動します。暗闇の中で、敵陣の端までひそかに移動していきます。

・人数も少ないので、敵も気づきにくかつたのでしょうか。そして敵陣に近づいたときに、突然水がめを割ります。すると中に入っていた松明の火が、辺りを照らします。そして角笛も一斉に吹かれ、深夜の敵陣に鳴り響きました。

・その結果、ミディアンの敵陣は慌てふためき、同士討ちを始めます。先手を取ったギデオンの舞台はミディアン人を追撃し、二人の将軍を打ち破るのです。まるで「軍師官兵衛」の逸話を読んでいるようです。

(4月 21日)「士師記 7: 1~8」

水を手にすくってすすった者の数は三百人であった。他の民は皆膝をついてかがんで水を飲んだ。

(士師記 7 章 6 節)

- ・神さまはミディアン人をギデオンに渡す約束をします。そのときギデオンの元には、32,000 人の兵がいました。ただ神さまは、「あなたの率いる民は多すぎる」と言います。当然のことながら、兵は大いに越したことはありません。
- ・しかし「兵力」で勝利を収めたとすると、民は「自分たちの力」で勝ったのだと勘違いしてしまいます。だからまず恐れおののいている者を帰させ、そして膝をついてかがんで水を飲む者も帰させてしまいます。
- ・残ったのは、わずか 300 人でした。最初の人数の 1%にも足りません。多分兵士たちは、大きな不安に襲われたことでしょう。しかしその中で、神さまが働かれるのです。神さまのみ手を、彼らは感じるようになるのです。

(4月 22日)「士師記 7: 9~14」

仲間は答えた。「それは、イスラエルの者ヨアシュの子ギデオンの剣にちがいない。神は、ミディアン人とその陣営を、すべて彼の手に渡されたのだ。」

(士師記 7 章 14 節)

- ・32,000 人から 300 人に、兵の数は減りました。その不安な様子は、神さまにも届いていたことでしょう。そこで神さまはギデオンに、一つの提案をします。それは従者プラと共に、敵陣に行けというものです。
- ・いくら今のように明るくないといっても、敵陣にはいなごのように数多くの兵士がいました。らくだも海辺の砂のように、それこそ数え切れないほどいたのです。そこにスパイのように、二人は紛れ込みました。
- ・そこには、神さまのみ守りがあったのでしょうか。ギデオンは敵に見つかることなく、一人の男が夢の解釈をしているのを聞きます。それは彼らが、ギデオンたちを恐れている証拠でした。ギデオンのこの行為は、神さまを試したことはないのでしょうか。

(4月 7日)「士師記 4: 1~5」

ラピドトの妻、女預言者デボラが、士師としてイスラエルを裁くようになったのはそのころである。

(士師記 4 章 4 節)

- ・士師記では、同じパターンが繰り返されます。士師が立てられイスラエルに平穏な日々が訪れる→士師が死ぬ→イスラエルの民が主の目に悪とされることをおこなう→主は怒り敵の手にイスラエルの民を渡す→民が助けを求めて叫ぶ→士師が立てられる、です。
- ・次に士師として立てられたのは、ラピドトの妻デボラです。彼女は女預言者でもありました。デボラという名前には、ミツバチという意味もあります。彼女はなつめやしの木の下でイスラエルを裁いていました。
- ・聖書に女性の指導者が登場するのは、大変めずらしいことです。ただ彼女は先頭に立って敵国に向かうのではなく、人を遣わしていたようです。いわゆる軍師のような役割ということでしょうか。

(4月 8日)「士師記 4: 6~11」

バラクはゼブルンとナフタリをケデシュに召集した。一万人が彼に従って上り、彼と共にデボラも上った。

(士師記 4 章 10 節)

- ・デボラはバラクを呼び寄せ、ヤビンの將軍シセラを攻めるように言います。そのときにバラクはこう言います。「あなたが共に来てくださるなら、行きます。もし来てくださらないなら、わたしは行きません」。
- ・このような会話があるということは、普段デボラは命令だけして自分は動かなかったのかもしれない。しかし今回はデボラも重い腰を上げ、一緒にシセラを倒すべく、ケデシュに向かいます。
- ・このときデボラは、「神さまは女の手でシセラを売り渡す」と預言します。この女というのがデボラを指すのか、あるいは他の女性なのか、このときデボラは分かっていたのでしょうか。

(4月 9日)「士師記 4:12~24」

シセラは彼女に、「天幕の入り口に立っているように。人が来て、ここに誰かいるかと尋ねれば、だれもいないと答えてほしい」と言った。

(士師記 4 章 20 節)

- ・カナンの王ヤビンの将軍シセラはバラクとデボラが率いるイスラエル軍(ゼブルン人とナフタリ人) 10,000 人を見て、すぐに軍隊を召集します。鉄の戦車も 900 両ありました。この数が 10,000 人の前にどれほどの意味をなすか、それは分かりませんが。
- ・デボラはバラクに対し、「立ちなさい。主が、シセラをあなたの手にお渡しになる日が来ました。主が、あなたに先立って出て行かれたではありませんか」と言います。ここから先、戦うのはバラクだけです。
- ・将軍シセラは、カイン人へベルの妻ヤエルの天幕で息絶えます。シセラが仕えるヤビンとカイン人へベル一族との間には友好関係がありましたが、へベルの妻ヤエルはシセラを殺害するのです。そこにはどのような「裏切り」の理由があったのでしょうか。

(4月 10日)「士師記 5:1~5」

イスラエルにおいて民が髪を伸ばし 進んで身をささげるとき 主をほめたたえよ。

(士師記 5 章 2 節)

- ・4 章では、女預言者デボラが士師としてイスラエルを裁く様子が描かれました。彼女はバラクを呼び寄せ、1 万の兵を出させます。その兵はカナンの王ヤビンの将軍シセラを追い詰めます。そしてシセラはカイン人へベルの妻ヤエルによって殺害されたのです。
- ・この 5 章は、イスラエルの人々がカナンの王ヤビンを滅ぼしたその次の日に歌われたものです。旧約聖書には何か大きな出来事があった後に、歌が歌われることがあります。出エジプト記 15 章の「海の歌」はその一例です。
- ・ただ今回の歌は 1 節にもあるように、デボラとバラクとで歌ったものです。新共同訳聖書の小見出しには「デボラの歌」と書かれていますが、正確には「デボラとバラクの歌」と言った方がいいのかもしれない。

(4月 19日)「士師記 6:33~37」

主の霊がギデオンを覆った。ギデオンが角笛を吹くと、アビエゼルは彼に従って集まって来た。

(士師記 6 章 34 節)

- ・ギデオンの行動を機に、ミディアン人だけではなくアマレク人、東方の諸民族までもが結束して川を渡って来ました。ということは昨日の箇所でもギデオンを責めたてたのは、イスラエルの人だったようです。
- ・今回はギデオンの角笛を聞いて、アビエゼルの人たちだけでなく、アシェルやゼブルン、ナフタリからも人々が集まってきて合流しました。それは「主の霊がギデオンを覆った」からに他なりません。
- ・しかしギデオンは、まだ確信を持つことができませんでした。彼の一族はマナセの中でも最も貧弱で、ギデオンは家族の中でも一番年下だったからです。そこでギデオンは神さまに「しるし」を求めます。

(4月 20日)「士師記 6:38~40」

すると、そのようになった。翌朝早く起き、彼が羊の毛を押さえて、その羊の毛から露を絞り出すと、鉢は水でいっぱいになった。

(士師記 6 章 38 節)

- ・ギデオンが神さまに求めたしるしは、麦打ち場に置いた羊の毛だけを露で湿らせて欲しいというものでした。雨が降っても湿りそうですが、「周りの土は乾いたまま」という条件をつけることで、神さまのみ業でなければ実行不可能なしるしです。
- ・神さまはギデオンが望むようにされました。ここまでも、ギデオンはよくそんなこと神さまに言えるなあと少し恐ろしくもなりますが、ギデオンは「もう一度試させてください」と言うのです。
- ・神さまを試すことで、たくさんの代償を払わされてきたイスラエルの人々の話が旧約聖書には多く載っています。その反面、ギデオンは二度試したのに無事でした。この違いは何なのでしょう。

(4月17日)「士師記6:19~24」

ギデオンは、この方が主の御使いであることを悟った。ギデオンは言った。  
「ああ、主なる神よ。わたしは、なんと顔と顔を合わせて主の御使いを見  
てしまいました。」  
(士師記6章22節)

・主のみ使いに料理を提供する場面は、創世記18章にもあります。三人の  
人がマムレの樫の木のでアブラハムに現れ、イサクの誕生の予告をした場面  
です。このときはサラがパン菓子を作っていました。

・今回は酵母を入れないパン、肉、肉汁を用意します。ただ主のみ使いはそ  
れらを食べるのではなく、岩の上で焼き尽くしてしまいます。その結果ギデ  
オンは、彼が主のみ使いであることを悟るのです。

・この時代、神や神のみ使いを見ると死ぬ、と考えられていました。しかし  
主のみ使いはギデオンに、死ぬことはないと伝えます。そこでギデオンは主  
のために「平和の主」という祭壇を築きます。神さまとの新たな関係を記念  
したということでしょう。

(4月18日)「士師記6:25~32」

その夜、主はギデオンに言われた。「あなたの父の若い雄牛一頭、すなわち七  
歳になる第二の若い牛を連れ出し、あなたの父のものであるバアルの祭壇を  
壊し、その傍らのアシェラ像を切り倒せ。」  
(士師記6章25節)

・神さまはギデオンに対し、非常に具体的な命令を下します。それは「バア  
ルの祭壇を壊し、アシェラ像を切り倒せ」というものです。ミディアンの人々  
が拝んでいる異教の神々の像を破壊せよというのです。

・ギデオンは恐れしました。それはそうだと思います。いわゆる「テロ行為」  
です。アシェラ像に至っては切り倒して薪にし、雄牛を焼き尽くすために用  
いよとまで言われるのです。ミディアン人の怒りを買うことは目に見えてい  
ます。

・ギデオンという名前には、「叩き砕く者」という意味があります。恐れの中、  
彼は夜中に主が命じられたことをおこないます。その結果、町の人たちはギ  
デオンを責めたてますが、父ヨアシユは「バアルが本当に神なら、自分で何  
とかするだろう」とかばいます。 10

(4月11日)「士師記5:6~11」

わが心はイスラエルの指揮する者らと共に この民の進んで身をささげる者  
と共にある。主をほめたたえよ。  
(士師記5章9節)

・8節にあるように、イスラエルの人たちの「新しい神々を選び取った」とい  
う行動のために神さまは怒り、「隊商は絶え、旅する者は脇道を行き、村々は  
絶えた」という状況になりました。因果応報、自業自得ということでしょう  
か。

・そこで「わたしデボラはついに立ち上がった。イスラエルの母なるわたし  
は ついに立ち上がった」と歌います。立ち上がったのではなく、神さまに  
よって立てられたという方が正しいようにも思いますが。

・「イスラエルの母」という表現も、他ではあまり聞きません。「信仰の父」  
というとアブラハムですが、「イスラエルの～」という言い方はあまりしない  
ようです。導き主としての自覚ということでしょう。

(4月12日)「士師記5:12~18」

奮い立て、奮い立て、デボラよ 奮い立て、奮い立て、ほめ歌をうたえ。立  
ち上がれ、バラクよ 敵をとりこにせよ、アビノアムの子よ。  
(士師記5章12節)

・12節の自らを鼓舞する言葉は、何を意味しているのでしょうか。神さまが  
いつも共におられることを思い起こし、常に力づけてくださることを覚えな  
さいという意味かも知れません。だとすれば、わたしたちにも必要なこと  
ですね。

・この歌の元になった4章を見ると、ゼブルン族とナフタリ族だけがバラク  
と共に戦ったと記録されています。しかし5章14~18節にはエフライム、  
ベニヤミン、マキル、イサカル、ルベン、ダン、アシェルといった部族も登  
場します。

・実は聖書にはこのように矛盾に思える箇所が多くあります。それは聖書が、  
様々な資料や伝承を集めて作られたと考えられているからです。つまり4章  
と5章とはもともと別のものだったと考えられているのです。なかなか複雑  
ですね。 7

(4月13日)「士師記5:19~23」

主の御使いは言った。「メロズを呪え、その住民を激しく呪え。彼らは主を助けに来なかった。勇士と共に主を助けに来なかった。」

(士師記5章23節)

- ・ここでは戦いの様子が歌われています。カナンの人たちは戦ったものの、銀を奪うことができなかつたと書きます。これは戦いに勝利して、戦利品を奪うことができなかつたという意味になります。
- ・20節の「もろもろの星は天から戦いに加わり」という記述は、この戦いが神さまによるものであると示しています。そのような相手に対して、カナンの人たちはどうしようもなかつたのでしょうか。
- ・23節には「メロズを呪え、その住民を激しく呪え」とあります。メロズの人たちは戦いに加わらず、傍観者でした。争いが嫌いだったのかもしれませんが。でもその人たちが呪われるのです。とても悲しい記述です。

(4月14日)「士師記5:24~31」

女たちの中で最も祝福されるのはカイン人へベルの妻ヤエル。天幕にいる女たちの中で最も祝福されるのは彼女。

(士師記5章24節)

- ・カナンの王ヤビンの将軍シセラは戦いから逃れ、カイン人へベルの天幕に逃げ込みます。王ヤビンとカイン人へベル一族とは有効な関係にあつたので、ここまでくれば大丈夫だとシセラは安心したでしょう。
- ・しかしへベルの妻ヤエルは、水を求めるシセラにミルクを飲ませ、布で彼を覆い、シセラのこめかみに釘を打ち込みます。その結果、シセラは死んでしまうのです。27節に「かがみこみ」という言葉が三回続くのが印象的です。
- ・そのヤエルこそ、女たちの中で最も祝福される人だとデボラとバラクは歌います。「女の中で最も祝福される」というとイエス様の母マリアが天使ガブリエルに言われた言葉ですが、マリアとヤエルは随分違いますね。

(4月15日)「士師記6:1~10」

イスラエルは、ミディアン人のために甚だしく衰えたので、イスラエルの人々は主に助けを求めて叫んだ。

(士師記6章6節)

- ・5章の最後に「国は四十年にわたって平穏であつた」と書かれていましたが、6章の最初には「イスラエルの人々は、主の目に悪とされることを行つた」とあります。コピペをしているかのように、同じことが繰り返されます。
- ・今度の「敵」は、ミディアン人です。ただ敵と言っても、イスラエルの人たちが悪いことをしたために、神さまがミディアン人にイスラエルの人々を渡したわけなので、ミディアン人がひどい目にあわされるのはかわいそうな気がします。
- ・ここではまず預言者が遣わされ、「主の言葉」を伝えます。文字通り、神さまの言葉を預かつて来たわけですから。彼はイスラエルの人々に、「わたし(神さま)の声に聞き従わなかつた」という指摘をします。そのことをはっきりさせたうえで、行動を起こすのです。

(4月16日)「士師記6:11~18」

彼は言った。「わたしの主よ、お願いします。しかし、どうすればイスラエルを救うことができましょう。わたしの一族はマナセの中でも最も貧弱なものです。それにわたしは家族の中でいちばん年下の者です。」

(士師記6章15節)

- ・テレビンの木の下に、主のみ使いが来て座りました。そして酒ぶねの中で小麦を打っているギデオンに現れて語り掛けます。「勇者よ、主はあなたと共におられます」と。ギデオンは、それならなぜミディアンに支配されるようなことになっているのかと尋ねます。
- ・すると主のみ使いは、驚くべきことを言います。「あなたのその力をもって行くがよい。あなたはイスラエルを、ミディアン人の手から救い出すことができる。わたしがあなたを遣わすのではないか」。
- ・これは、ギデオンの召命と呼ばれるものです。ただギデオンは主のみ使いの言葉に対して、自分の弱さや足りなさを一生懸命アピールします。これは果たして、「謙遜」と言えるのでしょうか。